



Special Interview ①

教育哲学からの提言

そもそも教育とは何か、 学校は何をするところか

Ittoku Tomano

熊本大学教育学部
准教授

苫野一徳

とまの・いっとく ● 1980年生まれ。早稲田大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学。博士(教育学)。多様で異質な人たちが、どうすれば互いに承し承認しあうことができるかを探究。また、哲学者、教育学者として、「そもそも教育とは何か」「その教育はどうあれば『よい』と言えるか」という原理的テーマの探究を軸に、これからの教育のあり方を具体的に提言。一般財団法人軽井沢風越学園設立準備財団の理事として、2020年開校予定の幼・小・中混在校「軽井沢風越学園」の立ち上げに参画。

教育とは「自由とその相互承認」の
感度を育むこと

多くの教職員が携わる学校づくりにおいて大切なのは土台を共有すること。教育の構想や実践において、土台がなければ、時に対立を引き起こし、協働の妨げにさえなります。そう話す、熊本大学の苫野一徳准教授に、教育哲学の立場から、「そもそも教育とは何か」「学校は何をするところか」という教育の本質について、お話を伺いました。

取材文／堀水潤一 撮影／加来和博

私は、小学校低学年の頃から、「なぜ生まれてきたんだろう」「生きるとは何か」といったことを本気で悩むような、少し変わった子どもでした。周囲になじめず、特に、同調圧力が強くなる中学・高校時代は、「なぜ、みんなと同じことを考え、同じ話をしなくてはいけないのか」「何のために学校はあるのか」と自問し、精神的につらい日々を過ごしていました。そんななか、自分の存在を認めてくれる一部の先生や親の存在は救いました。

そんなことから学校教育に関心をもち、教育学部に進学したのですが、最も知りたかった「そもそも教育とは何か」という問いの答えが見つかることはありませんでした。当時はポストモダン思想の最盛期。何を言っても、

「絶対はない」と返される強力な相対主義の前では、「よい教育と言っても、人それぞれだよ」で済まされてしまうのです。そうした力に押され、「教育とは何か」という原理的な研究はほとんど行われていませんでした。

しかし、現実の社会は、それでは済みません。具体的な教育課題を前に、対立を解消し、協力する必要があるとき、「人それぞれ」と片付けられては何も始まらない。少なくとも誰もが納得できるところまで考えを深め、共通理解をもたなければ、教育の構想も実践も成り立たないのです。

そのような時期、哲学に本当の意味で出会いました。哲学とは、さまざまな物事の本質をとらえる営み。哲学的思考をものにする中で、自身の問題も根っこから解き明かされ、生きづらさを克服できるようになって



きたこともあり、「教育とは何か」という大問題に対しても哲学から挑もうと決意しました。専門的に言うなら現象学という哲学と現代的に再構築したヘーゲル哲学を組み合わせることで答えが得られると感じたのです。

その結果、長年の問いに対する私なりの結論ができました。それは、すべての子どもたちが自由に、つまり生きたいように生きられるための力を育むことです。ただ、それだけでは互いにかがまま放題の自由を主張することになり、争いが生じてしまいます。自分が自由に生きるためには、他者の自由も認めないといけません。これを「自由の相互承認」と言います。ということ、「相互承認の態度を育むことを土台にして、すべての子どもたちが自由に生きられるための力を育むこと」。これこそ、教育の本質であるという結論に至ったのです。この「原理」を土台に敷けば、教育の実践も行政も、ブレることなく力強く進んでいけると確信しています。

ここで誤解してほしくないのは、哲学とは、常に、吟味・検証に開かれたものであり、テーブルの上で考え方を置くもの。「原理」というのも、最



土台を敷くことから すべては始まる。 だから実践に哲学を

も深い考え方の中で、絶体の真理とは違います。それを踏まえたいうえで、この「自由とその相互承認」は、現段階で最も底まで落ちた、近代市民社会における公教育の普遍的原理だと思っています。

土台がないと「方法の パッチワーク」になる恐れ

混迷の時代、一旦、根本に立ち返ろうということでしょうか。抽象的な話にもかかわらず、今、教育哲学が多くの先生方に興味をもたれていることを嬉しく思います。

とはいえ、全体の中では少数。基本的に、哲学者と、現場の先生方の思考モードは真逆と言っているでしょう。立場の違いによるもので、良し悪しではありませんが、物事の本質から考える哲学者に対して、現場の先生方は、目の前の生徒から考えるため、具体思考が得意です。生徒に合いそうな教育方法があると、「早速、授業に取り入れてみよう」。効果がなければ、「では、次はこれ」と、現実に即して柔軟に対応できるわけです。

学校づくりのお手伝いのため、各地の学校を訪問すると、多くの先生が関心を示すのは教育の「方法」です。そこに土台がなければ、単なる「方法のパッチワーク」に陥る危険性があり

ますが、「何のために」という土台があれば、教育目標の実現に近づくことができるでしょう。

また、一人ひとりの思い入れが強い教育の世界では対立が生じやすいものですが、皆が納得する考えを共有することで、対立から協働に向かうことも容易になるでしょう。

このように、日々の実践においても原理を敷くことがどれだけ大事か。それを先生方にわかっていたいただきたい。「教育哲学」という存在があることを心に留め、実践にいきづまったときなどに思い出してほしいのです。

多くの問題の答えは出ている。 あとは時代にあわせた実装を

そもそも哲学とは人類の叡智の結晶です。私たちが今悩む教育課題の多くは、プラトン、ルソー、デューイなど、前の時代の哲学者によって答えが出されているとも言えます。

と言うと、「答えが出ているのに、なぜ解決できないのか」と反論されるかもしれません。理由は、哲学とは原理の学問であるから。原理がわかったところで、「では、どうするか」を考えるプロセスが始まるのです。

例えば、「自由とその相互承認」という原理が立ったならば、では、「現代において自由に生きる力とは何か」



左から、『教育の力』(講談社現代新書)、『どのような教育が「よい」教育か』(講談社選書メチエ)、『はじめての哲学的思考』(ちくまプリマー新書)、『勉強するのは何のため?』(日本評論社)ほか、著書・共著書多数。

「それはどうすれば育めるのか」「自由とその相互承認の態度はどうすれば育めるのか」など、具体的に考えるべき問いがいくつか立ちます。

すると、教えられたことを覚える教育のままでは、果たして自分で考えたり、解決したりする、自由になる力が育めるのだろうか。型通りの枠にはめた教育で、他者を認めることはできるのだろうか。少しでも枠から外れた人がいると攻撃する習性を身に付けてしまわないか、と答えが探しやすくなるわけです。

この100年、世界中で優れた理論や、それに基づく先進的な教育実践が展開され、教育課題に対する実践知は出揃っています。あとはシステムの実装であり、高大接続改革やカリキュラム改革も、そうした文脈の下で行われていると思っています。

「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」という発想

私個人は、「自由とその相互承認」を、学校教育で実質化するためのヴィジョンとして、「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」という方向性を提唱しています。

学びの個別化とは、人それぞれ、学びのペースも、興味関心も、自分合った学び方も異なっているということ、とことんペースを考えましよう、ということ。一斉授業を否定するわけではなく、少なくとも、皆で同じ内容を、同じペースでやり続けるシステムに限界がきているのは明らか。「落ちこぼれ」や「吹きこぼれ」を生む原因にもなりかねません。

ただし、個別化は孤立化につながる恐れがあります。そのため、必要に応じて人の力を借りられる環境が用意されていないといけません。緩やかな協同性に支えられた個の学び。個別化と協同化の融合が大切です。

そしてプロジェクト化は、生徒なりの問いを立て、生徒なりのやり方で、生徒なりの答えにたどりつく探究のことで。高校生くらいの発達段階であれば半分以上の時数をこうした授業にあてたいくらい。「基礎・基本をやらずに探究などできない」と言う声も聞き



ますが、探究を通じて基礎・基本を学んだり、必要性を感じて学び始めたりすることもあろうでしょう。人類の知の遺産として系統的なカリキュラムがあるわけですが、誰もが一歩ずつ階段を上るように学ぶ必要はないし、もつとラディカルなことを言うと、誰もがまったく同じことを全部絶対に勉強しなくてはいけないということもありません。

学びの個別化など、現状の慣習では実現するには高い壁もありますが、「学びのコントローラー」は教師ではなく生徒が持つのだ、という発想は大切にしてほしいと思います。

現代の問題の多くは、
前の時代の哲学者が
答えを出している



これからの「普通」を目指し
軽井沢風越学園を立ち上げ

2020年に開校予定の幼・小・中混在校、軽井沢風越学園に、共同発起人の一人として名を連ねたことで、そうした理想の教育を具現化する機会が訪れました。理事長は、楽天の創業メンバーで副社長退任後、長年教育に携わってきた本城慎之介さん。副理事長は、公立小学校等で学習者中心の授業づくりに取り組んできた岩瀬直樹さんです。実は、「方法のバックワーク」や「学びのコントローラー」というフレーズは、岩瀬さんからの拝借です。

その岩瀬さんは若い頃、話術と授業内容で子どもたちを引き付けるカリスマ的な教師を目指していたとのこと。事実、評判の高いクラス運営をしていましたが、異動した途端、そのクラスが少し荒れてしまったことがあったそうです。子どもたちは口々に「新しい担任はつまらない」と文句を言う。それを聞いて、彼は間違いに気付きます。「自分は、口を開けて美味しいエサを待つだけの子を全力で育てていたのだ」と。それが学びのあり方を見直すきっかけになったという話に私は強く心を打たれました。そんな方たちと理想を実現できるのはありがたい話



人は恐怖や不安では動かない。
エロスで動くんです

です。

本格的な準備はこれからですが、同校では、「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」を、「自己主導の学び・協同の学び・探究の学び」と言い換えて、カリキュラムの中核に据える予定です。ティーチングも重要ですが、1時間限まるまる二斉授業にすることはないでしょう。さらに、「探究」を一番の中核にすることで、自由に生きるための力を育み、相互承認の態度を育みたいと思います。

失敗も繰り返すでしょうが、目指すのは10年後、20年後の教育の「普通」。行政や他の多くの学校などとも連携し、全国の学校のモデルにしたいと思っています。

今の学校に足りないのはエロス。
わくわくする気持ちを大切に

「なぜ今、教育改革なのか」と語られるとき、よく引き合いに出されるのが、「AIで仕事がなくなる」「子どもたちの6割以上は今存在しない職業に就く」といった言説です。そうした危機感をもたせることも大事ですが、煽り過ぎるのも疑問です。思うに人は、総体的に見て、恐怖や不安では動きにくい。どちらかというと、「こうすれば、わくわくする未来が開ける」と感じたときのほうが動くと思うの

です。

そうしたわくわく感や喜びのことを哲学ではエロスと呼びます。今、学校に足りないのは、このエロスではないでしょうか。次から次へとやってきては、押し付けられるように感じてしまふ教育改革の波に、どんよりした空気が漂っているのは大学も同じです。

その一方、形式的な研修や講演では反応が薄いのに、「こんな教育のあり方っていいよね」や「どんな子に育てほしいか」から始まり、「そもそもなぜ教師を志したのか」まで、赤裸々に語り合う場を設けた研修では、先生方のエロスが掻き立てられている姿をよく目にします。

今後、探究型の学びが主流になれば、先生自身も、自分なりの問いを立て、自分なりの答えにたどりつく探究活動が大事になるでしょう。学びを仕事とする先生方にとって、わくわくしないはずがありません。そうやって学校全体が学びのエネルギーにあふれた場所になる。そこに、地域の人たちや小・中学生、留学生などが集い、多様性がごちゃ混ぜのラーニングセンターのようになればなおさらです。多様で異質な人々が、互いを承認し、それぞれの知恵をもちよって教育をより良いものにしていく。これも学校のあるべき姿だと思います。